

じょうこうじ

掟光寺だより

令和6年
7月号

行事案内

●7月15日(月・祝)

「虫供養

・(清正公・七面・鬼子母神大祭)」

13時30分から



「第二の矢」を受けない

お釈迦さまは弟子達にこのように問いかけました。

「未だ仏の教えを聞いたことが無い人達(凡夫)と仏の教えを聞けるあなた達(仏弟子)。凡夫も仏弟子も共に同じ人間であることに変わりありません。快く感じたり、不快に感じたり、また喜んで、憂いたりもします。人間である以上、苦楽を感じ、また喜怒哀楽な

どの感情が生まれます。では、凡夫と仏弟子と一体何が違うのでしょうか？」

その場にいる弟子たちは、誰一人答えられません。するとお釈迦さまは次のように言いました。

「凡夫と仏弟子の何が違うのか。それは二つ目の矢を受けるか否かの違いなのです。人間である以上、私達は物事や出来事から何かを感じ受け取ります。苦楽を感じたり、そして喜怒哀楽などの様々な感情が生まれてきます。中には、そういう感情が一切生まれてこない(無関心)こともありま。そのような苦楽などを感じる作用や、そこから生まれた感情、また無関心というのも含め、これを『受』と呼びます。



そして、仏法を知らない凡夫は、二種類の『受』を感じます。それは例えるなら、第一の矢に刺され、そして第二の矢にも刺されるようなものです。

例えば、自分の好ましいものに対して、快い感覚を受け、嬉しいという感情が生まれます。そして更に、それを熱望したり、執着します。それ故に、飽くことなく貪り求める『貪欲』という煩惱に囚われてしまいます。

また、例えば嫌悪するものに対して、不快な感覚を受け、苛立ちという感情が生まれます。そして更に、それを憎み、憤怒し、また害そうとする心を起こします。それに、激しく怒り、憎しみ怨む『瞋恚』という煩惱に囚われてしまいます。

さらに、例えば自ら興味を抱かないものに対して、なんら感情を持たない、いわゆる無関心となります。そして更に仏法であるこの『受』の理を知らないため、自らの関心事のみに心奪われ、視野が狭まります。それ故に、道理や物事があるがままに見て知ることができない『愚痴』という煩惱に囚われてしまいます。



一方、仏法の教えを聞ける仏弟子は、ただ一つの『受』を感じるだけなのです。それは例えるなら、第一の矢に刺され、第二の矢を受けないようなものです。

例えば、凡夫と同じく、自分の好ましいものに対して、快い感覚を受け、嬉しいという感情が生まれます。しかしその快感に酔いしれることがありません。それ故に、『貪欲』の煩惱に染まることはありません。

例えばまた、凡夫と同じく、嫌悪するものに対して、不快な感覚を受け、苛立ちの感情が生まれます。しかし、その不快感に振り回されることはありません。それ故に、『瞋恚』の煩惱に染まることはありません。

例えばまた、自ら興味を抱かないものに対して、なんら感情を持たない、いわゆる無関心となります。しかし、仏法の教えであるこの『受』の理を知っているため、自らの関心事以外にも気がつき、視野が広がります。それ故に、『愚痴』の煩惱に染まることはありません。第二の矢を受けないとは、こういうことなのです」

煩惱とは第二の矢によって引き起こされる感情のことです。悟りとは煩惱を無くすことではなく、第一の矢を受けてもそれによって心に余計な荒波を立てないことをいうのです。



